



## 服部 麻知子さん

- ・職業：染織作家
- ・出身：東京都
- ・南部町在住歴：21年
- ・染織工房 悠々

色付いた落ち葉が美しい11月のカフェ・ド・穂のかで、空気に溶け込むような温もりのある染織作品がまるでそこに元々あったかのように並んでいく。

今回取材させていただいたのは、南部町に住む染織作家の服部麻知子さん。

「作品は、展示する場所によって全然違って見えるんです。それが、とっても面白いですよ。」

そう言いながら、約1ヶ月間開催される自身の展示会の作品を、テグスや木を使って飾っていく服部さんの姿は、自分の作品とまるで対話を楽しんでいるようだった。

染織の道に進むことになったきっかけ、また南部町で生活するようになったのにはどのような経緯があったのか。

### “おばあさんになってもできる仕事が見たい”

東京生まれの服部さんが、染織に興味を持った初めのきっかけは、デパートで機織りの実演販売をしていたのを目にした時のこと。

織り機という機械の仕組みや、織り機にかけられた経糸と緯糸が組み合わさって布になっていくという様子は、当時高校生だった服部さんを虜にした。

そして、その時の記憶は彼女のその後の人生に大きく影響を与える。

当時は大学進学するのが当たり前になってきつつあった世の中。

でも、「本当にそれでいいのだろうか？」と疑問を持った服部さんは、美大を受けつつも、「おばあさんになってもできる仕事が見たい。」と思ったのだそう。

そして高校3年の夏休みにお父様の知り合いを頼って見学に行った京都の機織り工房の一つに、卒業後すぐに弟子入りし、5年間そこで染織を学んだ。

とてもこだわりを持った先生に教わった染織は、“染料も水もそれぞれの土地で違うのだから、それぞれの場所でできるやり方をしなさい”ということ。

機織り機も古くから使われてきた地機から、それが進化していった高機など種類があり、先生から学んだ様々なことが、鳥取で住むことになって活かされることとなる。



## “南部町との縁”

弟子入りした染織の先生が、米子市のアジア博物館開館に携わっていたが、その準備中に亡くなられ、それを引き継ぐことになった服部さん。軌道に乗ったら東京に帰るつもりだったが、当時たまたま東京から伯耆町に里帰りされていた彫刻家の入江達也さんと出会った。

入江さんと結婚後2年程は米子に住んでいたが、南部町に移り住むことになった。きっかけは、ご主人がまだ東京に住んでいた頃、鳥取出身の画家である齋鹿逸郎さんと画廊で出会い、親交が深まるうちに、齋鹿さんの実家である南部町（旧会見町）の家に住んではどうか？という勧めだった。

南部町に引っ越してきたのは、お子さんが2歳の頃。

嫁に来たわけではなく、借家人として部落に入るのは珍しいことだったが、浅井（集落名）の方達はとても温かく、またお子さんが小学校に上がると学校のPTAなどで地域の人との繋がりも出来たことで自然に集落には溶け込んでいった。

また、齋鹿さんが連れてこられるお友達には美術関係の面白い方々が多く、地域の方々だけでなく、外から来られる方々の空気も楽しかった。

「南部町は自然が豊富ですよ。」

東京では限られた空間で、音にもスペースにも気を配らなければならない環境。

一方南部町では、裏山で染色に使う材料が採れ、庭の一角に染め場を作ることもできて、作業を存分にできる十分な場所があるのはとても恵まれていること。

今後も、たっぷりの自然と温かい人たちに囲まれた中で、時間を大切にしながら、自分のできることをやっていきたいと服部さんは話す。

### 【今後の展覧会予定】

2019年6月24日~29日@銀座煉瓦画廊（東京）

兄の服部多加志さんと初の兄妹展示。

麻知子さんは染織作品、多加志さんは彫刻（木とステンレス）作品



渡邊舞（わたなべまい）/大阪府出身  
南部町地域おこし協力隊

### ～取材者の一言～

今回の取材で印象に残ったのは「おばあさんになってもできる仕事がしたい」という服部さんの言葉でした。今でこそ選択肢が増えて来たように思いますが、それでも大学進学が“普通”の世の中。何がしたいかわからないけど、とりあえず進学しなきゃと思う学生は少なくないと思います。でも、いつの時代も「自分で道を切り開く」ことに変わりはない、「自分の人生は自分がどう選択するか」なのだと思います。

そして、二人で盛り上がった「大山素敵ですよ！」「南部町自然が多いですよ！」という話。改めて、良いところに住んでいるな～と実感することができました！